

公開シンポジウム「子ども政策の総合化について考える」

2021年10月31日(日) 14:00～17:00(13:30より入室可)

オンライン開催(Zoomウェビナー)

[主催] 日本学術会議心理学教育学委員会 排除・包摂と教育分科会／乳幼児発達・保育分科会

[共催] 東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター(Cedep)

指定討論

子ども政策の総合化の意義と課題

小玉重夫(東京大学)

浮かびあがった論点

- * 貧困、差別、格差が拡大する中で、「子どもの声」、「子どもの権利」、「当事者性」に応答(response)する主体は誰か？ 政府の立場(秋田報告での状況説明)、東京都の立場(雲田報告)、NPO法人の立場(荘保報告)
- * 「子どもの権利」の視点からの、ジェンダー平等としての子ども政策総合化(例えば一場コメント)
- * 学校を中心とする格差の再生産構造を転換し、「教育」と「福祉」の二分法を克服する(例えば岡部コメント)

応答責任のジェンダーバイアスを 転換する

- * ジェンダー平等、家族の多様化は、第49回衆議院総選挙でも重要なテーマとなっている(立教大学、東大附属で、衆院選の争点を取り上げる授業を行った際にも実感した)。
- * ジェンダーバイアスの転換という点でいえば、専業主婦、あるいは専業主母を前提にした近代家族モデルと補完関係にある近代学校教育システムが原則的な形としてあり、それに対する例外あるいは欠損として共働き家庭、ないしは専業主婦がいない家庭の子どもたちの為の保育所があるという、この従来の原則・例外関係を組み替えていく。そうした視点から、乳幼児期の統合的な教育施設を新たに作る、そこでは保育の社会化、公共化を志向した子ども園に一元化していく。(福祉保健行政と教育行政の連携、統合⇒雲田、一場)

福祉と教育の二元論の脱構築

- * 従来の保育所と幼稚園の二元論＝保育所：選別的福祉概念への還元⇔幼稚園：保育の「教育」化という形で、選別的な福祉施設としての保育所（厚生労働省）と教育施設としての幼稚園（文部科学省）の分断が差別的に固定化され、保育の社会化を阻む帰結をもたらしてきた（池田祥子「すべての子どもたちに対応する「幼保一元化」を―「保育＝幼児教育」・「児童福祉」理念の再定義」公教育研究会編『教育をひらく』ゆみる出版、2008年）。
- * 子ども政策の総合化は、こうした分断の解消をめざすものでなければならぬ。**まず公助から（荘保）**
- * 「福祉」と「教育」の二元論を脱構築し＝組みかえていく、その際、**子どもを保護の客体としてではなく、権利の主体、市民としてみていく** ＝「学校（園）」でも家族でも（そして警察でも）ない、子どもの声に公的応答的責任を果たす地域の公共空間（グローバルコモンズ＝共有財産）の形成 **こどもの里はある意味で、グローバルコモンズ ⇒荘保、岡部**

DX、GXを通してのグローバルコモンズの形成 (地域エコシステム)

例えば、秋田報告でも示唆されていたOECDの地域エコシステム：OECDでは、2015年に立ち上がった“Education 2030”において、1990年代末から続いてきたキー・コンピテンシーやそれを土台としたPISA(学習到達度調査)の路線を、加盟各国からの新たな要望をふまえて、アップデートし、とくに、教育全体の目標を市民のウェルビーイングを基調とするものへとシフトチェンジし、その中間報告として、2021年には、Adapting Curriculum to Bridge Equity Gaps: Towards an Inclusive Curriculum『公平性の格差を架橋するためのカリキュラムの適用ーインクルーシブなカリキュラムへの向けて』という報告書を出版し、その延長線上で、地域エコシステムの活動を各地で展開しつつある(東京でも、そして西成でも・・・)。⇒秋田

「包摂 (inclusion)」から 「変革的包摂 (transclusion)」へ

- * 「**inclusion (包摂)**」には、外部の人を既存の秩序に組み入れるという前提がある。…そうした前提のもとで、教育は、子どもや信者を既存の秩序に包摂する営みとして捉えられ、既存の秩序それ自体の変革は問題とならない。…われわれの包摂的営みを **transclusion (変革的包摂)** ととらえることによって、外部の人を既存の内部に包摂するのではなく、既存の内部それ自体を変革し、そこにいる人々のアイデンティティを再定義し、私たちの姿勢をより開かれた、歓待的なものへと転換させていくことが可能になる。」(Gert Biesta, *Obstinate Education*, Brill, 2019, pp.109-111)

変革のエージェンシー(主体)として の子どもの方へ

- * Inclusion = 子どもは包摂される客体 ⇔ transclusion = 子どもは社会を変革する主体(エージェンシー)
- * 「教育」と「福祉」の組み替えは、切れ目なく、乳幼児教育から、小中高、大学へとせり上がり、「研究」と「教育」の組みかえ(知のイノベーション)を志向するものにならない。**ヨコ(幼保)**の組みかえだけでなく、**タテ(保幼小中高大)**の組み替えへ。Ex.子どもの哲学